AiGO ほっかいどう 195

[ほっかいどう 愛護]発行／2023年 1月　発行所／札幌市中央区北2条西7丁目かでる2･7 4F TEL.（011）271-0228
発行者／北海道知的障がい福祉協会　会長 大垣 勲男

希望学園・第二希望学園のみなさん

2023.01
CONTENTS

2P. 年頭所感
4P. 令和4年度全道知的障がい関係職員研究大会報告
6P. 人気No.1うちのメニュー
7P. ご長寿バンザイ
8P. 本の紹介
　手しごと探検隊「そだてらす　水耕栽培野菜」

新年のご挨拶

一般社団法人北海道知的障がい福祉協会　会長　大垣　勲男

明けましておめでとうございます。謹んで新年のご挨拶をさせていただきます。

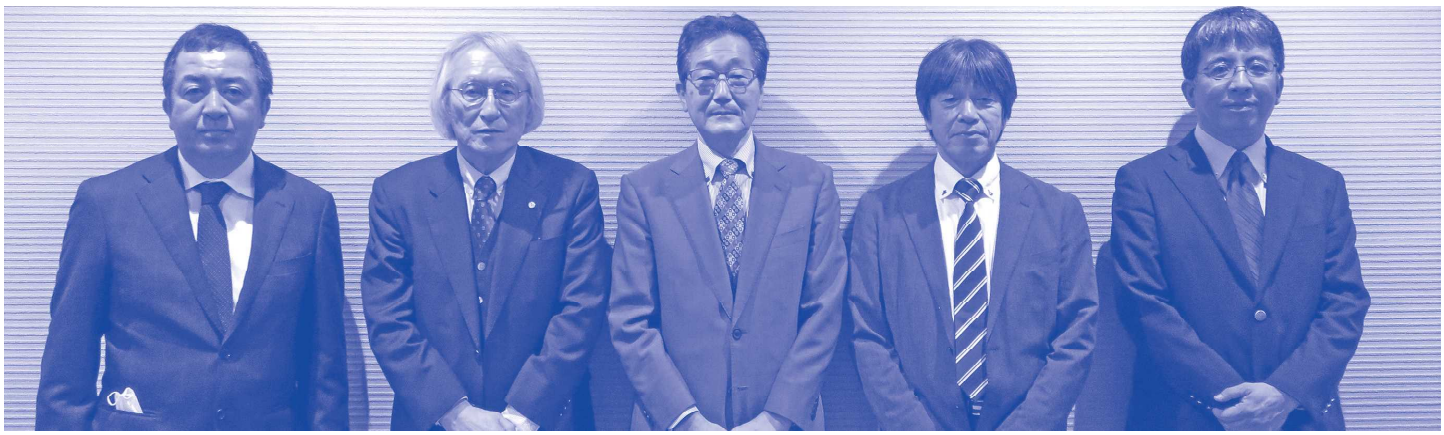
会員事業所の皆様には「withコロナ」を打ち出した令和4年度の各種協会事業に、ご理解とご協力をいただき誠にありがとうございました。お陰様で利用者の笑顔や弾む声、職員の熱い議論や輝く眼差しを久しぶりに拝見拝聴しとても嬉しく思っています。

昨年を振り返りますに、新型コロナウイルス感染症における1月の第5波から始まり年末にかけた第8波と、正にコロナに明けて暮れた1年でした。多くの会員事業所ではクラスターが発生しご苦労されたことと思います。これからの事業運営は「コロナはいつも横に居る」と認識するとともに、利用者の安寧な暮らしと職員の成長のためには、感染波を睨みながら暮らしの様々な制約や自粛、出張や各種事業への参加に的確な緩急をつけていくことが肝要だと考えています。この閉塞された3年間は、間違いなく我が国の障害福祉の進化を足踏みさせ大きなダメージを与えました。この現実から私たちはもう「withコロナ」を学習し実践しなければいけないと思います。

さらに昨年12月、当協会の会員事業所における利用者への虐待と不妊処置の事案が全国報道され、厚労大臣や官房長官までもがコメントする事態に至りました。不妊処置の事案については、利用者への強制や強要があったかどうか、グループホーム利用者の場合は出産子育てに制度的問題があることなどが論点だと思いますが、北海道行政が障害者総合支援法に基づく監査に切り替え調査を行っていますので、当協会としてはその調査結果を待ち必要な対処を行っていく所存です。一方、虐待事案に関しては、マスコミ報道の翌日から北海道障がい者保健福祉課、西興部村、当該法人と頻回に連絡をとり、入所利用者の安心安全な暮らしの回復を最優先に考え迅速に対処してきました。その内容及び経過については、近日中に会員の皆様に報告をさせて頂きたいと思います。早急に対応した手立ての一つが当該施設への応援職員の派遣でした。年末年始にもかかわらず9法人12事業所から申し出があり12月25日から2月6日まで応援延べ日数110日間、移動日も含めますと138日間の応援体制を組むことができました。論語に「義を見てせざるは勇なきなり」という教えがありますが、流石！北海道の福祉協会だ！と嬉しく思うとともに応援派遣に応じてくださった法人様と実際に現地に向かってくださる職員の皆様に深々と頭を下げたいと思います。他にも申し出て下った個人や応援したいけど今クラスターと戦っている最中で・・という事業所も沢山あったことを付記させていただきます。私たちの協会は事業者団体ですので、利用者のことを最優先に考え対処できたことを誇りに思います。

さて、昨年の振り返りが長くなりましたが、令和5年（度）も協会事業は極力参集型で取り組んでいきたいと思います。私が会長に着任して幾つかの挨拶の場面で「次のページを開きましょう・・」という言葉を使っていたことを覚えていますでしょうか。北海道はグループホームの利用者数も入所施設の利用者数も全国第1位です。また、1970年代をピークに数多く設置された道内の入所施設の利用者は毎年約100～150人減少しています。第二種社会福祉事業であるグループホームの運営法人は営利法人の進出が加速度を増し、札幌市ではホーム数・定員数とも遥かに社会福祉法人を上回っていますし、全道でも事業所数は営利法人のほうが上回っています。こういった地殻変動ともいえる状況を的確にとらえ、次代を見据えニーズに応える事業運営を行うために当協会の役割は大きいと自負しておりますので、令和5年度の新規事業に幾つか提案してまいりたいと考えています。

結びとして、障がいのあるご本人とご家族、協会会員事業所と職員の皆様にとって今年が良き年となることを心から祈念致しまして年頭のご挨拶とさせていただきます。



令和５年の年頭にあたって

北海道知的障がい福祉協会　副会長　畠山　信

全道の会員施設の皆様、明けましておめでとうございます。「輝かしい新年を…」と言いたいところですがコロナは去らず、皆さんギリギリの状況で頑張って支援に当たっていると推察致します。本当にご苦労様です。

さて、楽しい話題があまりない中で新しい年を迎えることになりましたが、年の変わり目を契機に変えたいのに変えられなかった事に挑戦しませんか。コロナだしあれもこれも無いから無理と最近よく言われますが、私世代の古い人達は制度の無い時代でも『利用者の豊かな暮らしのために』と無理にでも形を作り、それを制度に結び付けてきました。「無いものは創れ」が合言葉。必要性≪思い≫と切っ掛け≪出会い≫さえあれば何かが生まれるはずです。

「でも今は出会いを作るのも困難な時」なんて言っているあなた、窓を思いきり開け放ちそこから入ってくる風に五感を曝してみて下さい。特に施設長室の窓は取っ払っちゃう位の勢いで開けちゃいましょう。きっと何かが変わります。気持ちはウンと軽くなり、一歩先に勢いを持って踏みだすことができるようになる筈です。

いつも頑張っている職員の皆さん。利用者の笑顔を創れるのはあなただけです。もっと自信と誇りを持って足取り軽く行きましょう。令和５年が心地良い変化の年になりますように。

2023年を迎えて

北海道知的障がい福祉協会　副会長　中原　明

会員施設・事業所の皆様、明けましておめでとうございます。久しぶりに行動制限のない年末・年始を迎えましたが、３年越しのコロナ禍により、時が止まってしまった感があります。ウィズコロナの時代、むやみに恐れるのではなく、油断もせず基本的な感染対策をしっかりと取りながら、時計の針を少しずつ進め、利用者の皆さんに質と量を伴ったサービスを創意工夫して提供していきましょう。

昨年７月末に３年ぶりに開催された全道パークゴルフ大会。弾けるような利用者の皆さんの笑顔が忘れられません。利用者の皆さんの笑顔が仕事の原点です。ともすれば、閉塞感が漂う日々ですが、カタールで開催されたＦＩＦＡワールドカップでの日本代表チームの快進撃には大きな感動と夢をもらいました。初のベスト８という「新しい景色」をともに見ることはできませんでしたが、「新しい時代」の到来を感じました。

誰しも1回限りの人生。人は誇りをもって、等しく幸せに生きる権利があります。障がいがあるが故の生きづらさ、不便さがあり、その人のそばにいるから出来ることがあります。その人が人生を振り返った時、あなたに出会えて良かったと思えるような支援が日々求められます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

2023年を迎えて

北海道知的障がい福祉協会　副会長　佐藤　浩樹

会員施設・事業所の皆様、明けましておめでとうございます。昨年も普段の業務以外にコロナ感染予防、そして年末年始、現時点でもクラスターで気の抜けない大変な思いをされ、ご尽力いただいている皆様に改めて感謝申し上げます。その中でウイズコロナのスタンスで、昨年７月に全道パークゴルフ大会、9月にみんなあーと、１１月の全道職員研究大会と久しぶりに集合型で開催することが出来ました。皆さんと直接お会いしお話しすることができ、このような機会が少しずつ増えていって欲しいと願っております。

また、昨年１２月には会員入所施設での虐待やグループホームでの不妊処置についての件があり、落ち着かない年末でもありました。コロナ禍、年末年始の大変な中、当該施設の欠員補充として全道各地から応援職員派遣の協力いただき、お礼申し上げます。今回の事案は改めて権利擁護に関して考え直す機会になったように思いますし、皆様からの助言をいただきながら、今後考えていかなければならないことでもあると思っています。

課題は山積みではありますが、会員の皆様のご理解、ご協力をいただきながら、引き続き取り組んでいきたいと思っております。皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

令和４年度 全道知的障がい関係職員研究大会

大会を終えて

空知知的しょうがい福祉協会　会長　須崎　正寿

令和４年度全道知的障がい関係職員研究大会に当番地方会実行委員として携わりました。最初に三戸部運営研究委員長から空知がこの研究大会の当番地方会となっていること、さらには現地参集型で開催するという話を聞き驚きの連続でした。

早速、空知知的しょうがい福祉協会の三役に実行委員をお願いし、準備を進めることにしました。最初に頭を悩ませたのは、参加人数と予算です。コロナ禍での開催となるため、過去の参加人数は参考にならず、人数が読めない中での準備となり、費用をどのように抑えていくのかという課題がありました。開催日が近づくにつれ、第８波と言われる感染の流行が深刻となり、実行委員会の開催すら難しい状況になっていきました。密に打ち合わせることが難しいまま当日を迎えることになりましたが、当日は協会の皆様をはじめ実行委員、運営研究委員の方々に助けていただきながら、無事に研究大会を終えることができました。終えてみると、今回の研究大会では久しぶりに他施設の職員と顔を合わせることができ、画面越しではない生きた会話を楽しみ、現地参集型の良さを改めて感じました。

各部会の皆様には、情報が少ない中でいろいろとご迷惑をお掛けした部分もありましたが、ご協力いただきありがとうございました。また、このような状況でも快く講演を引き受け、福祉の志を語ってくださった講師やシンポジスト、コーディネーターの方々には心から感謝いたします。

感染の流行が拡大している厳しい状況の中で参加していただいた職員の皆様にも感謝すると共に、皆様に仕事の魅力や仕事を続けていく力を感じていただくことができたなら大変嬉しく思います。ありがとうございました。

発達支援部会

開会にあたり、北川聡子部会長より児童関連施策に関する中央情勢報告を交えた挨拶があった後、行政説明１として、厚生労働省障害児・発達障害者支援室障害児支援専門官の鈴木久也氏より、「障害児支援施策の動向」をテーマに、児童発達支援センター、障害児入所施設に関する児童福祉法改正に向けたスケジュールや主な検討事項などについて説明がありました。次に行政説明２として、北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課の冨加見昌孝課長補佐と福士元人主任から、障害児入所施設関連で「北海道における障害児の新たな移行調整の枠組みの構築」に向けた調査実施状況や、その課題・整理が必要な事項についての説明がありました。

最後に、通所事業所と入所施設の会員に分かれ、行政説明をしていただいた鈴木専門官、冨加見課長補佐、福士主任にもご参加いただき、各施設・事業所の取組みや近況等について活発な意見交換を行い閉会しました。

発達支援部会　副部会長　林寺　隆憲

施設入所支援部会

「入所施設における行動障害のある利用者への支援について」をテーマに、侑愛会星が丘寮施設長中野伊知郎氏にご講演いただきました。強度行動障害に対する最近の動向と「著しい行動障害に関する実態調査」から見えてくる現状や、当たり前の生活を支えるために必要な環境・標準的な支援・行動改善についての考え方などのお話をいただきました。はるにれの里梅原氏と緑星の里増渕氏よる「行動障害のある利用者への実践報告」では、その取り組みの中での障がいの特性に合わせた環境整備、支援に苦慮された部分やその結果などについて報告され、それぞれに講師の中野氏より助言をいただきました。入所施設では行動障害のある方に対する支援のあり方については身近な課題として抱えている事業所も多いと思われることや、久しぶりの対面での研修ということもあり、充実した研修となったのではないかと感じています。

施設入所支援部会　運営研究委員　佐藤　孝之

日中活動支援部会

日中活動支援部会では、生活介護事業の柱は、社会参加の機会を保証することだと提言してきました。

今回の分科会では、まず、大垣部会長が障害福祉の目的は共生社会の創出であり、日中活動の役割は社会参加の推進であることを権利擁護の視点から考える必要があると熱く語りました。その後、三名の登壇者が「創作活動と地域への関り」「構造化された自閉症支援を用いた職場体験」「重度障がい者の社会貢献･交流」という、それぞれ違った切り口からの「社会参加」について話してくださいました。

普段、私たちが行っている支援一つひとつが、利用者の皆さんが堂々と自分らしく生きる権利を守っているということに気づき、「社会参加支援」という一言では表しきれない、この仕事の奥深さ、素晴らしさを感じることができました。久しぶりにリアルで集まった皆さんの目の輝きがどんどん強くなっていくことが印象的な、気持ちが昂るような分科会でした。

日中活動支援部会　副部会長　木田　祥平

就労支援部会

「充実した働き方を考える～やりがい、意欲をもって働き続けられる支援とは～」をテーマに掲げ、就労支援部会研修会を開催しました。

高橋部会長から対面研修が３年ぶりに実施できたことや、コロナ禍でも就労支援や収益事業に向けた取り組みを継続して行っていることに対するねぎらい等が開会の挨拶となりました。

行政懇談会の報告、就労部会で実施した調査報告を行った後、日本理化学工業株式会社常務取締役の西川一仁氏にリモートでご講演いただきました。講演では、障がい者雇用を始めるきっかけや、如何に本人たちに仕事を理解してやりがいを持ってもらえるか、従業員に（障がいを）受け入れてもらえるかなど苦悩と工夫の中で事業を展開していったこと、大切なものは「愛情と関心」という想いを聞くことが出来ました。参加者からも「支援の振り返りになる。」「まだ話しを聞きたかった。」といった声が上がった研修会でした。

就労支援部会 副部会長　寺崎　純人

地域支援部会

地域支援部会も全員に声がかかり、集まったのは約３年ぶりです。初めにライフネットゆうばり中川博之施設長より調査報告として「日中サービス支援型グループホームの実態調査中間報告」がありました。報告に加えて夕張での取り組みの現状もお話しくださりコロナ禍でも止まることなく障がいのある人たちを地域で支え続ける様子を聞くことが出来ました。その後、地域支援センターゆう石亀善則施設長より、日中サービス支援型のグループホームを巡る道庁とのやり取りの話と、（福）空知の風松田愁司施設長より空知で地域生活支援に奮闘する実践の報告がありました。フロアとのやり取りの後、最後に変わらず元気な山崎千恵美部会長からの言葉を聞き、「関わる皆を元気するような仕事をしたい」と決意を新たにする地域支援部会でした。

地域支援部会　運営研究委員　大友　　崇

相談支援部会

活動を共にする相談支援事業所と障害者就業・生活支援センターのそれぞれの役割と連携の在り方をテーマに学びを深めました。元当部会所属の、社会福祉法人後志報恩会和光学園施設長金子宣裕氏に講師をお願いました。

導入として入職時に感じた、福祉の独特な世界観やサービス利用されている当事者の方のピュアさに魅せられたお話があり、初々しい入職時の感覚や戸惑いながらも必死に関係を模索したこと、しかし「逆に関係性を探られている」という違和感も福祉の魅力だったと振り返られています。福祉の社会情勢が変化する中で「地域で仕事をし、対等に生きていく」ために、「顔の見える、目的を共にした連携と役割分担」をもとに、企業や地域資源との連携を深めたそうです。「働きたいという想い」を受け止め、わからないことを「知るすべを創る」、その起点となる窓口がまさに、相談支援と就業・生活支援センターではないか。専門性を生かし、一人一人の幸せを支援する担当者として、「顔の見える関係から意味のある関係へ」連携を深めてほしいとメッセージをいただきました。

相談支援部会　部会長　戸田　健一

人気 ナンバー No.1

うちのメニュー

「誕生日リクエストメニュー」

社会福祉法人北光福祉会　障害児入所施設ひまわり学園　管理栄養士　名雪　美加

「誕生日に『私これ食べたい！』っていうものを出してほしいです。」数年前の嗜好調査アンケートに書かれた入所児童からのメッセージでした。誕生日は誰にとっても特別な日であり、好きなものに囲まれて過ごしたいという子どもの想いがひしひしと伝わってくる一文でした。この話をきっかけに、当園では誕生日に食べたいメニューを全員に聞き取りし、誕生日リクエストメニューとして食事を提供しています。

リクエスト内容はカレーライスやからあげ、ラーメンなどいわゆる子どもが好きな物が多いですが、中には「モツ」や「なす」など好きな食材を使って欲しいというリクエストもあります。時には作る側が苦労する料理もありますが、「おいしかったよ！また来年も同じのがいい！」と、満たされた表情で感想を伝えてくれる子ども達を見ると、作る側も達成感に包まれ、また頑張ろうと逆に元気を貰っています。

寮内に掲示している献立表に「〇〇さん誕生日リクエスト」と記載しているので、子ども達同士でお祝いの言葉を掛け合う微笑ましい光景も増えたようです。

自分の誕生日が近くなると「もうすぐ誕生日だよ。ごはん楽しみ！ケーキはチョコがいい～。」と、待ち遠しさを伝えてくれる可愛らしい子ども達。普段から食べているメニューであっても、自分で決めた自分のためのメニューという特別感が一番嬉しいようです。食事を通して子ども達の幸せに少しでも役立てるように尽力していきたいです。

「快気祝いに生ちらし寿司」

社会福祉法人　雪の聖母園　障がい者支援施設　雪の聖母園　管理栄養士　長原　千紘

当施設で利用者に一番人気のあるメニューはお寿司です。麺の献立の日にいなり寿司、行事食にちらし寿司を献立へ取り入れています。

11月は当施設でのコロナウイルスが落ち着いた快気祝いとして生ちらし寿司を提供しました。また、お寿司の中でも生寿司は特に利用者に好評です。12月には創設者やお世話になった方へ感謝をするミサの日があり生寿司を提供しました。利用者の皆様から「美味しかったよ」という声をたくさんいただきました。

コロナ禍でなかなか外出・外泊へ行けない利用者の為にも、これからも喜んでいただけるような食事提供を心がけて参ります。

ご長寿バンザイ

全道各地のご長寿さんのほっこりな毎日をお届けします。
うちの「ご長寿さん」を紹介したい！という方、ご応募おまちしています。

弾むおしゃべりをいつまでも

ふじの学園

社会福祉法人函館緑花会障害者支援施設ふじの学園は、大野平野と函館湾を一望できる美しい丘の上に建設され、今年で５２年を迎えました。

さて、今回紹介する方は、ふじの学園開設当初の昭和４４年から入所されている坂本準一さん(８６歳)です。準一さんは当施設を利用する男性の中では最年長となります。数年前に足を悪くされ、現在は車椅子での生活を送っていますが、それまでは、長らく窯業班に属しており、職員の手を借りながら、お皿や花瓶などの作品を制作していました。器用な方とは言えませんが、窯出しの都度、味のある作品を楽しませてくれました。

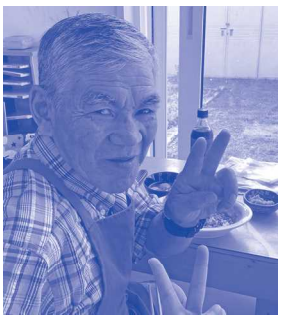
また、準一さんは、お話することが大好きで「クリスマス会は〇日にあるよ」「職員の〇〇さんは今日早番だよ」など、ふじの学園の出来事や職員のことを、他の利用者さんに伝える情報通でもあり、今もそのおしゃべりは健在です。ユーモアあふれる言動はいつも職員を笑わせてくれます。

コロナ禍の今、様々な活動が制限されていますが、準一さんは日々のアクティビティや余暇活動などにも積極的に参加し、時にはゲームに興じ、カラオケでは十八番の「北国の春」を飽きがくるまで一生懸命歌っています。

不思議と周囲の人を明るくする力を持っている準一さん。その朗らかな声が途切れることなく、これからも元気で穏やかに過ごして欲しいと心から願っております。

地域生活を満喫

静内桜風園



日高郡新ひだか町にある社会福祉法人静内ペテカリ　生活支援センターが運営するグループホームに生活している岡本神市さん（72歳）をご紹介します。

岡本さんは、旭川で出生、新ひだか町静内で幼少期を過ごされたようです。小さい時からいろいろなお仕事をされ苦労された時期もあったようですが、平成15年、53歳の時に幼いころ過ごした新ひだか町静内に戻りたい！というご希望もあり、社会福祉法人静内ペテカリ　静内桜風園を利用することになりました。

入所施設である静内桜風園から生活支援センターの運営するグループホームを何か所か移動し、現在はアパート型グループホームでより自立した生活を送られています。

以前は自分で改造した自転車（無数のアンテナやラッパ！！がついている）に乗って街を移動する、調理をして職員に食事をふるまう、最近はコロナ禍でなかなか行事などはできない状況が続いていますが行事の時はいつも、司会進行などの役割をするなど、地域での生活を満喫なさっています。

また、岡本さんは、根っからの働き者で働いていない方が落ち着かないようです。昔は、町内の古くからの知り合いのおうちに伺って、色々なお仕事のお手伝いをしていたこともあります。

現在は、町内の焼肉屋さんで網を磨く仕事（この網を磨く仕事は、岡本さんでなければ！！というような感じです。）と地域活動支援センターに所属して古新聞の回収など行っています。焼肉屋さんでのお仕事が終わると、いつも「今日は（網が）こんだっけだったよ～。」と磨いた枚数を報告してくださいます。

いつも体を動かしているからなのか、岡本さんはとても元気に毎日を過ごしています。明日もあさってもずっとお元気で過ごしてほしいと思っています。

本の紹介

めんどくさがる自分を動かす技術

出版社：永岡書店
ISBN-10 : 4522434162
ISBN-13 : 978-4522434161

皆さん、やる気充実していますか？私は全くしておりません。やる気のない時は、どうしています？私は「やらない」という選択肢が使えればよいのですが、そうもいかないので、とりあえずチョコレートを食べてドーピングです。これで8割は乗り越えられます。小さな頃から、夏・冬休みの課題は溜めて片付けるタイプ。そんな私にぴったりな一冊。「自分を動かす技術」なんて、実はよくわかっていない領域だった気がする。「なんとなく」とか「どうにか」という冠をつけて、自分を動かしていた気がする。きっと「どうにか」というのは無理矢理やる気を起こして目の前のタスクをこなしていた。

この本の読み始めに「過剰行動を減らし、不足行動を補う。」というフレーズが出てくる。これが意外に出来ないから、「面倒くさい」につながっていたことに気づかされる。無駄を取り除いて、その出来た余白に不足分を補う。こんな簡単な原理原則ができないことが、自分を動かせない理由。自分を動かすために敢えての引き算から始める。多くの人は、きっと満杯の器にさらに詰め込むから無理が掛かる＝ストレスになり、やる気が削がれる。だから、初めに無駄を取り除いて余白を作り、必要な要素を注ぐ。極めてシンプルだが、これがなかなか出来ない。

書中は、50のコツで構成されており、ページの半分はそのコツを表す挿絵が描かれており、読み進めやすい。50のコツをすべて実践出来なくても、少ないコツでも実践することで、少しずつ「動ける自分」になれる。コツを活用して、「動けるチーム作り」にもつながると思われる。

ふと、とある同僚の事を思い出す。この同僚５年以上の付き合いなのだが、必ず11月くらいになるとペースダウンする。はじめは気のせいと思っていたが、毎年その傾向が現れる。理由は定かではないが、それを見ると私は秋を感じる。紅葉みたく季節の風物詩ならよいが、業務はそうもいかないので、この本を紹介しよう。

（K）

手しごと探検隊！

そだてらす「水耕栽培野菜」

「そだてらす」は恵庭市にて水耕栽培による葉物野菜の製造と販売を行っています。

水耕栽培の特徴は、第一に露地栽培とは違い天候や環境に大きく左右されず、温度･湿度･栄養素などを一元的に管理･調整することで、安定した規格･量の生産管理に取り組めること、第二に冬期間に利用者様の作業が減少しがちになる北海道の特性に縛られず、一年間を通し作業活動･就労トレーニングに取り組めること、第三に室内製造により農薬等を使用せず、安心･安全な野菜が季節を問わず製造できること、が挙げられます。

柔らかさやシャキシャキ感、それぞれに特徴のあるレタス類4種とそのままサラダにも使えるMIX野菜の製造を行っています。

販売先は、飲食店やホテルレストラン、札幌近郊のコープさっぽろなど。 **恵庭市役所前地域サポートセンター　すとりーむ**TEL **0123-32-8000**でも一部製品を販売しております。

製造･販売:社会福祉法人恵庭光風会　就労継続支援B型事業所そだてらす
住所:恵庭市牧場219−4
TEL:0123−34−0848／FAX:0123−32−8181

編 集 会 議

コロナ感染者も高止まりながら、全国旅行支援が再開され、社会活動も徐々に緩和されたのを機にそろそろ集まりませんか？と学生時代の友達からお声がかかった。そう言えば前回は鎌倉集合だったなあ、あれからもう6年が経つのか、、、職場でも本州への旅行も解禁になったことだし、、、と立場も忘れて？飛行機の往復券を即購入。はじめはこのご時世なのでみんな半信半疑で話していたが、いざ集合の日が近づくと職場に休みをお願いしたとか親のショートステイを予約したなどそれぞれがその日に向けて準備を進めている様子が伝わってくる。退職した人も多いがまだ現役で働いている人や親の介護をしている人もいて一泊二日の旅行もなかなか調整するのが大変そうだった。私といえば皆に会うときは必ず二泊三日以上で羽を伸ばすのを楽しみにしている。特別目的もないのだけれども、せっかく飛行機に乗って出かけるのだから元を取りたい（？）と欲張ってしまう。ましてや今回は学生時代を過ごした仙台集合である。卒業以来の友達もいて私のわくわく度は最高潮だったが、結局いろいろあって前日のキャンセルになってしまった。いろいろあったいろいろはもちろんいいことではないので、私には二重，三重のショックであり、かなり落ち込んでいた。そんな中、ラインを通して旅行の実況中継をしてくれる彼女たちのおしゃべりに元気づけられ、まるで一緒に参加しているかのような気分になった。声だけ聴いていたときは40年前と変わらないなあ～と昔の姿を思い浮かべていたが、実況中継の画像を通して見た彼女たちは確実に時間の経過を映し出していた。かくいう私もその一人だけど、、、。最近は先のことはわからないのだから会える時に会おう！が合言葉になっている。何年後になるかわからないが、次は北海道集合との事なので今からどこに行こうかと一人勝手な妄想が膨らんでいる。

（広報編集委員長　富田　栄子）